

ベルクソンにおける純粹知覚と直観

名大大学院 山田 秀 敏

(一)

拙論の目的は『物質と記憶』における「直観」なるタームの分析を通じて、ベルクソン哲学の『意識に直接与えられたものについての試論』(以下、『試論』と略記)から『物質と記憶』への発展のある一面を論述することにある。ベルクソンは『物質と記憶』において「直観」なる術語をしばしば使用しているのであり、しかもそれは知覚との関わりの中において使用されることが多い。すなわち『物質と記憶』におけるベルクソンの直観論は、ユッソンも指摘するように、かなり知覚的なのであり、この点において後の諸著作におけるそれとは異なっている。したがって、われわれは『物質と記憶』のなかでもとりわけ第一章と第四章を中心に議論するが、しかしそれがベルクソンの直観のすべてを議論し尽くしているわけではないことをあらかじめ注意しておきたい。

ベルクソンは『試論』において持続(durée)を発見した。持続とは質的多様・質的相互浸透なのであり、本質的に空間化されないもの、あるいは少なくとも空間化されるやいなやその本質を失ってしまうものである。空間化されてしまった思考方法が生み出した空虚な議論のひとつに決定論があり、それは空間化された思考内部においては反論不可能であった。なぜなら、空間的思考方法とは最初に実在の原子化をしておいて

次にそれらを何等かの法則によって連結しようとする思维方法であるが、決定論への反論もそれと同じことをしているはずだからである。故に自由を理論的に保証するためには非空間的なものの定立が不可避であり、それがまさに持続であった。持続によって自由が理論的に保証され、眞の生成・新しいものの創造があり得るとされる。故にベルクソンが『試論』において追求したものは流動性そのものであり、それは実在の見かけの固定性・日常性の背後に存在しているものなのである。したがって、空間性か時間性か、固定性か流動性か、決定論か自由か、という二者択一が『試論』の問題だったのであり、それは相互通訳不可能な二元論を形成していたのである。そして持続の流動性の発見こそが『試論』におけるベルクソンの主張の根本だったのである。

ところが、『物質と記憶』においては事情が異なっている。『物質と記憶』は心身結合を問題にした著作であるが、ベルクソンは結論的に「意識と物質、精神と身体は、こうして知覚において接触するにいたった」(p.246)と述べる。知覚においてこそ心身の結合は確認されるというのであるが、ところで「知覚するとは不動化するということである」(p.233)。これは奇妙な事態ではあるまいか。問題は既に流動性ではなく、固定性である。固定的なものとは、『試論』においては空間的思考が取り扱うことができるものであり、時間性の考察なくして自足できるものであり、持続しないものである。ベルクソンは『物質と記憶』では『試論』と正反対の主張をしているように見える。「例えば(『試論』においては)精神にとってこの上もなく危険な寄生者として告白されていた言語が、今や実在への適応とか行為への通路といった肯定的機能をまとしてあらわれてくる」⁽⁴⁾

『試論』においては歪曲するものは空間の側にあった。言語も空間的なものとされた。⁽⁵⁾『物質と記憶』にお

いてはあたかも歪曲という事柄をも肯定し得るという点に議論が成り立っているかのようである。しかしながらわれわれが拙論のテーマとして選んだ「直観」は、定義上、実在を歪曲してはならないものである。ジャンケレヴィッチは『試論』から『物質と記憶』への学説の首尾一貫性を問題にしたが、われわれも彼と同じ問題を提起したい。すなわち、『試論』から『物質と記憶』へのベルクソン哲学の発展史的研究を「直観」なる術語を通じて行うことが拙論の目的である。

(二)

『物質と記憶』におけるベルクソンの「直観」の用法は相当に知覚的ではあるが、しかしかなり自由にその語を用いてもいる。おそらく『物質と記憶』におけるベルクソンは「直観」なるタームの用法についてそれほど意識的ではなかったからであろう。しかし、たとえそうであっても、そこにはベルクソンの特徴が出ているというべきであって、しかもその用法をここでは便宜上、三種類に分類しておきたい。

その第一は「純粹知覚直観」とでも呼ぶべきものであり純粹知覚における瞬間的な直観のことである。第二は「収縮的直観」であり記憶力による感覺的質の収縮の際にあらわれる。第三はいわば「非功利的直観」であり実在の運動性の把握である。

第一の「純粹知覚直観」の用例は例えば次のようなものであるが、ベルクソンはこれにしばしば「直接的」(immédiat)あるいは「実在的」(réel)という形容詞を付けている。⁽⁷⁾「わたしたちの外界の知覚を開花させる実在的な、いってみれば瞬間的な直観の土壤」(p. 88)。「実在的直観の役割は…もはや記憶を呼び起こし、これに肉体をあたえ、これを活動的にし、したがって現実にすることではかない」(ibid.)。「結局のところ実

「そのものと一致するこの直接的な直観」(p. 68-69)。「わたしたちは真に自分の外部へ純粹知覚のなかに置かれるのであり、その際、直接的な直観において対象の實在に触れている」(p. 79)。「純粹知覚は實在からそのまま切り取られた断片のようなもので、他の物体の知覚に自己の身体の知覚すなわち感情を交えることもなく、その現在の瞬間の直観に別な諸瞬間の直観すなわちその記憶も交えることもないような存在に属する」(p. 262)。以上の引用から明らかであるように、ベルクソンは純粹知覚における知覚対象の把握は直観的であり、しかもそれは實在そのものと一致していると主張している。

第二は「収縮的直観」であり、それはしばしば「唯一の」(unique)という形容詞によって修飾されている。「実際上は知覚と分かつことのできない記憶力が、現在のなかに過去を加え、また持続の多数の瞬間を唯一の直観のなかに収縮(contracter)させる」(p. 76)。「記憶力は持続の多数の瞬間を唯一の直観のなかに把握させることによって、事物の流れの運動すなわち必然のリズムからわたしたちを解放する」(p. 256)。ベルクソンは収縮においても直観という言葉を使用しているのであるが、収縮や弛緩はベルクソンの心身結合論の鍵となる概念であるので、稿を改めて議論することにした。

第三は「非功利的直観」であり、この直観には時に「純粹な」(pur)という形容詞が用いられている。「ふつう事実と呼ばれているものは、直接的直観にあらわれるままの現実ではなく、現実的なものが実践上の関心と社会生活の要求に順応した姿である。純粹な直観は、外的であろうと内的であろうと、分割不可能な連続のそれである」(p. 203)。「こうした欲求が作り出したものを破壊するならば、わたしたちは直観のその最初の純粹さを回復し、現実との接触を取り戻すであろう」(p. 205)。この第三の直観が前の二者と区別される点は、生活の欲求を破壊した点において成立する直観であるという点である。

以上、われわれは『物質と記憶』におけるベルクソンの直観の用法を三つに区分してみた。ベルクソンがそれらのどれにも「直観」なる語を与えた以上、われわれはそれらに共通して内在する意味を明確にするべきであろう。われわれはそれらを更に分析していかなければならない。

(三)

『物質と記憶』におけるベルクソンの直観論は知覚に深く関わっているが、そのことはベルクソンの直観が単に知覚イマージュの直接的所与性に尽きるということの意味するものではない。どのような知覚理論であれ、知覚像が直接的に与えられていることを否定することはできない。しかし、そのことはあらゆる知覚論がどこかで直接的所与性を導入しなければならないことを意味しているにすぎないのであるから、直接所与性だけではそれをベルクソンの意味で「直接的直観」と呼ぶことはできない。ベルクソンは従来の観念論的体系も実在論的体系も知覚を「真なる幻覚」(p.70; p.269)におとしめてしまっていると非難するのであるが、たとえば幻覚にせよ直接所与性は確保できるからである。したがってベルクソンが直観的な直接性を確保するためには、少なくとも次の二つの学説を主張する必要がある。

A 純粹知覚においては知覚主体と物質とを媒介する「表象」は必要とされない。むしろ「表象」の定立によって知覚理論は根本的に損なわれてしまった。⁽⁸⁾

われわれはだれしも最初は何知覚される物質が知覚されるとおりに存在していることを信じていた。また、それらの物質がわれわれの意識から独立に存在することも信じていた。ところが、いったん表象なるものが定立されてしまうと、この信念は素朴なものとして退けられてしまうのである。表象は知覚されているはずの何物

かと知覚主体との媒介にすぎず、媒介が富むだけ物質は貧困化していく。表象は確かに直接所与性を満足させるが、実在との一致を満足させることはできない。というのも、表象が哲学体系内で果たすべき主要な任務は「確実性」の確保、すなわちベルクソンの言葉を借りれば「純粹認識」(p.24)であると考えられていたからである。そこで表象と実在性との調停がはかられることになるのであるが、両方を充たすことができるものとして挙げられるのは第一に表象が実は実在そのものであるという極端な観念論であろうが、しかしそのような体系はベルクソンによれば、科学の成功を説明することができない (cf. p.3, p.23)。そこで表象の実在性を高めるために、表象がいればそこに再会しに行くある基体を定立することになるが、しかし、物体の直接所与性はすべて表象にいわば吸収されてしまうから、そのような基体は仮に存在としては確保されるとしても、しかしわれわれの知覚を超越したものになってしまう。そうでなければ、実在は単なる延長に限りなく近付いていくことになる。ところがまさにそれによって表象はあらゆる延長性と縁を切ることになってしまう。したがって「この表象は空間の外へ追放され、はじめの出発点であった物質と、もはや何一つ共通点をもたぬことになされる」(p.37)のである。

ベルクソンの意味での「直接的直観」なるものが存在するとするならば、それは直接所与性と所与の実在性とを同時に満足させねばならないのであろうが、しかしいったん表象なるものが定立されてしまうと、それらを同時に満足させることは困難になる。ここでベルクソンの知覚論は見かけ上、素朴実在論に近づく。⁽⁹⁾ というのも、素朴実在論は知覚対象が知覚されているように存在していることを認めているからである。ベルクソン自身、自分の知覚論を「常識の素朴な確信への復帰」(p.41, cf. *avant-propos de la septième édition*)と述べているほどである。

ではベルクソンの純粹知覚論においては、素朴实在論がしばしばそれによって反論されるところの錯覚論法 (the argument from illusion) は成立しないのであろうか。もちろん成立しないのであって、錯覚 (例えば、ピンクのネズミ) というものはベルクソンによれば記憶力の所産にすぎぬからである。「しばしばこの記憶はわたしたちの現実の知覚を押し退けることがあって、その場合わたしたちがこの記憶から残しておくものは、若干の指示、古いイメージを思い出させる単なる記号にすぎない。その代わりに知覚はたやすく手取り早いものになる。しかしそれがもとであらゆる種類の錯覚もまた生じてくる」(p. 30)。純粹知覚とは「あらゆる形での記憶を排したもの」(p. 31) であるから、記憶力を前提にしたタイプの錯覚論法は定義上成立しないのである。

さらに言えば、半分水につかった棒がまがって見えるのは単なる知覚的事実であって錯覚ではない。なぜなら、それは「半分水につかった」棒だからである。黄疸の人はものが黄色く見えるからといって、それは錯覚ではない。なぜなら、彼は黄疸だからである。オースティンも指摘するように、ある事象が錯覚であると主張する時、同時に錯覚が生じる当然の理由が既にその主張に含まれてしまっているのである。錯覚論法は物体は不変であるはずなのに、その知覚像は可変的であるという実体論的信念による議論であらうが、しかしそこには知覚対象を孤立的に扱って単純化しても状況に重大な変化はあり得ないという素朴な理論的前提がある。表象は定立された時点で既に意識の中で自足的であるとされるから、孤立的に扱っても何ら不都合はないと考えられてしまっているのである。しかしまさにその点にベルクソンは異議を立てるのである。「ある対象の視覚的知覚においては脳も神経も網膜も、そして対象そのものも、緊密に結びついた全体、すなわち網膜の像も一挿話にすぎない連続的過程を形づくっている」(p. 24) というべきであり「より一般的に言うならば、孤立

した物質的対象を仮構することは一種の背理を含まないだろうか」(p.19)とベルクソンは述べる。

錯覚論法は、ある状態においていわゆる錯覚が生じ得ることを例を枚挙して事実に説得したのち、次に錯覚についての議論を知覚一般に対して適用しようとする。錯覚の原因となったものが「感覚与件」であるならば、すべての知覚は「感覚与件」をその構成要素としていた場合である。なぜなら、錯覚の原因となつたあるものは意識への直接所与性を満足させているとされるが、正常な知覚の場合もまったく同様に直接所与性を満足しなければならぬと考えられているからである。故に、錯覚であろうと正常な知覚であろうと、それらの間には質的な差異はないとされるのである。したがってベルクソンの言うように、そのような立場を採れば知覚は「真なる幻覚」になってしまう。「これは既に述べたことだが、幾度繰り返しても足りないほど大事なことだろう。わたしたちの知覚理論は、もしある種の装置が、特定の時期にある知覚の錯覚を生じるとしたら、それは常にこの知覚そのものを十分に生じえたのだとする考えによって、完全に損なわれてしまうのである」(p.241)。

表象の導入によって知覚の直接所与性による確実性は十分に充たされるにしても、それはその分だけ知覚対象の实在性を減少させることによってしか得られなかった。では何が必要か。表象という概念を捨ててしまうことである。ベルクソンの言う「直接的直観」は、したがって単に直接所与の確実性に尽きるものではなく、实在そのものへと向かうものである。それは如何にしてか。

B 知覚イメージと物質との間に質的な差異が存在してはならない。

ベルクソンによれば、従来の知覚論は知覚の存在理由をまったく誤解していた。それは「あらゆる知覚はまったく思弁的関心をもっている。それは純粹認識である」(p.24)。と考えていたのである。しかし、ベルクソン

によれば知覚は行動のためにしか存在しないのである。「わたしはイマージュの総体を物質と呼び、その同じイマージュが特定のイマージュすなわちわたしの身体の可能的な行動に関係付けられた場合には、これを物質の知覚と呼ぶのである」(p.17)。したがって、知覚は根本的に功利的であるはずであり、単なる物質とそれの知覚との差異はそれが行動に関係されているか否かの相違しかない。「まずイマージュの総体があり、この総体のなかに行動の中心があつて、利害関係のあるイマージュはこれにぶつかつて反射するように見える。このようにして知覚が生まれ、行動が準備されるのである」(p.46)。したがって「イマージュにとっては、存在すること、意識的に知覚されてることとの間には、単なる程度の差異があるだけで、本性の差異があるのではない」(p.35)のである。ベルクソンによれば、存在から知覚イマージュへは「減少という道を通つて移行することができる」(p.32)。故に単なる存在としての物質と知覚されたイマージュとの関係は「全体と部分の関係」(p.74-75, p.259)にすぎなくなる。知覚は功利的なものではあるが、しかし「直接的直観」を主張し得るためには、純粹知覚は實在に届いていかなければならない。ここで要求されている功利性は實在を歪曲するものであつてはならない。引用文中の「反射する」とはそのような事態を表現しているのである。光が鏡で反射されてもやはりもとの光であるのと同じように、物質に反射作用が加わつて知覚が生じるにせよ、それはやはり元の物質なのである。ところで功利性は必ずしも實在の正確な反映を必要としない。というのも、例えば、誤字をそれと気づかず正しく読んでしまうことがあるからである。したがって、ここに功利性についてのベルクソンの特殊な見解があるはずである。

ベルクソンは自ら『物質と記憶』を二元論的著作であると述べるが、すなわち精神および物質の實在性を認めるのであるが、そのために導入してきた概念は周知のように純粹知覚と純粹記憶であつた。しかしながら、

知覚にせよ記憶にせよ従来の二元論からすれば、それらはどちらも意識的なタイムである。意識作用を前提したタイムである。したがって『物質と記憶』が従来の實在論と観念論の同時的乗り越えを目的としていた以上は、物質性の導入は必要不可欠であるから、知覚イメージは単なる知覚像という意味を越え、物質そのものをも示していなければならない。純粹知覚に錯覚があり得ないのはそのためであって、なぜなら、そこには主観性がないからである。しかし、もちろん純粹知覚は知覚であらねばならない。そうでなければ「いかにして物質が知覚を生み出すか」という古典的な二元論的アポリアとまったく同じ問題設定になってしまふからである。したがって、そこに純粹知覚の功利性の主体すなわち主観性なき主体性を定立しておく必要があった。それがベルクソンが『物質と記憶』で語るところの身体なのであって、それは知覚世界の中心にあるという点ではなるほど特権的であるが、しかし、要するに単なるひとつのイメージにすぎないのである。故に、身体的功利性が知覚のひとつの存在理由にならざるをえず、しかもその功利性は主観性を持ってはならないのである。ベルクソンは心身問題を、その是非はともあれ、二つの意識的なタイムを使用することによって解決しようとしたため、純粹知覚は物質性を持たざるをえなくなり、しかも、同時にやはり知覚主体を持った知覚であらねばならなかったのである。その結果、単なる現存としての物質と知覚されている物質との間には質的差異が存在してはならないという要請をせざるを得なくなる。故にベルクソンは「わたしたちの知覚は事物の一部をなしているから、事物はわたしたちの知覚の本性を共有することになる」(p.202)と主張することになったのである。

以上から明らかであるように、『物質と記憶』におけるベルクソンの直観はその知覚論と深い関係をもって、いる。純粹知覚における「直接的直観」は少なくとも直接所与性と所与の實在性を必要条件としているはずで

あり、その条件は実は純粹知覚論の中においてすでに確保されていたということができようであろう。

(四)

前節でわれわれはベルクソンの直観のあるものが知覚的であることを論じたわけであるが、にもかかわらず、ベルクソンの直観は単に知覚的作用にとどまらない内容をもつというべきであり、それをこれから議論していくことにしたい。直観が直観である以上は知覚との分岐点があるはずであり、それを「非功利的直観」に求めることができる。

「純粹知覚直観」において功利性は限定するものとしてあらわれる。「知覚は権利においては、全体のイマージュであるはずであり、事実においては、ただ利害関係のあるものに縮減されているのだから、説明すべきことは知覚がいかにして生まれるかではなく、いかにして自己を限定するかということである」(p.38)。したがって、事実上の知覚は身体と利害関係のあるものに限定されているわけであり、また単なる限定であるが故に知覚されたイマージュと物質との間には質的差異がなかったのである。

ところが、「非功利的直観」においては功利性は分解するものとしてあらわれる。「カントが証明したような思弁的理性の無力は、根本的にはおそらく、身体的生活のある必要に隷属して、わたしたちの欲求を充たすため分解する必要のあった物質に働きかける知性の無力に他なるまい」(p.205)。すなわちここでベルクソンは功利性を生活のために実在を分割する必要に見ているのであり、「こうした欲求が作り出したものを破壊するならばわたしたちは直観のその最初の純粹さを回復し、現実との接触を取り戻すであろう」(p.205)とベルクソンは述べる。ところが、その破壊の作業には「激しく例外的な努力」(p.209)が必要とされるのであって、

それが成功するならば「直接的認識はそれ自身のうちに正当な根拠と証明を見いだす」(ibid.)のである。

ここでの功利性は言語や行動のために知性が必然的に行う分解の作業に由来するものである。ゆえにこの功利性の破壊は可能であるが、しかしそれは知覚全般を越えるものではない。というのも「外的知覚の基本的条件を超えようなどと企てるのは空想もはなはだしい」(p.208)からである。分解は空間的図式による作用であるが、図式的空間から離れたからといって現実的空間から離れたことにはならない。したがって、「ある程度まで延長を去ることなく空間から離れることができるわけであり、この点にこそ直接的なものへの復帰があるだろう」(ibid.)とベルクソンは述べる。彼の言いたいことは、空間と意識とは『試論』的な対立図式の中にあるのではなく、それらはそもそも対立してはいないということなのである。「直接的な実在とじかに面接してみよう。もはやわたしたちは知覚と知覚される事物、質と運動との間に、超えがたい距離も本質的な差異も見いださなければかりか、本当の区別を見いだすことすらもない」(p.245)。

(五)

われわれは先にジャンケレヴィッチと同じ問題を提示しておいた。『物質と記憶』は『試論』の結論に忠実であろうか。もちろん『物質と記憶』は『試論』以上の哲学的な労作なのであり、したがってそこに新しい概念が導入されていることはむしろ当然なのではあるが、しかし、『物質と記憶』は『試論』の結論の首尾一貫した発展であるということが出来る。

『物質と記憶』における「直観」の用法は、非観念空間的なものの実在性を確保するという点で『試論』の問題意識を引き継ぐものである。そして、観念的あるいは図式的空間は『物質と記憶』では心身問題の理論的

な躰きの石として批判されることになる。

イギリス経験論にとって触覚は空間知覚を代表するものであった。しかしこの立場が維持できないのは明らかであって、というのも意識的のみなされるかぎりでの触覚は延長をもたぬものであるからである。したがって、それがいかにして延長を獲得するのか、外界の事物にいかにして的中し得るのか、他の感覚（とりわけ視覚）との関係はいかにして確保されるのか、まったくわからないのである（cf. pp. 48-49, pp. 63-64）。表象は実は空間的でさえない。表象は空間を再構成するところか、空間的であるはずの事物を、ベルクソン自身の表現によれば「空間の外（hors de l'espace）」（cf. p. 37, p. 47, p. 239）へと追放するものである。「空間の外」というベルクソンの表現の意味するところは、従来の理論が現実的空間を考えることにさえ不適切であったということなのである。ベルクソンが純粹知覚論によって批判したのは、こうした表象の在り方なのである。表象という概念が歪曲した空間をもとの単純な空間へと取り戻すことが『物質と記憶』におけるベルクソンの目的のひとつであった。

われわれはここまで『物質と記憶』におけるベルクソンの直観論を追ってきたわけであるが、それらの直観が帰するところは知覚における「拡がり」（*l'extension*）の導入である。それは意識は本来、空間と対立するものではないということの意味している。これが『物質と記憶』の新しさのひとつであるが、しかし図式的空間性の虚偽性の暴露という課題について言えば『試論』に連続しているというべきであり、その点において『物質と記憶』は『試論』の結論に忠実であったのである。そのことを「直観」というタームの分析から描き出すことが拙論の目的であった。

ベルクソンからの引用(すべて『物質と記憶』)はP.U.F.の単行本を用い、ページ数を直接本文中に示した。また、註を含めて、強調はすべて筆者のものである。

また、Essai sur les données immédiates de la conscience 或D.I.を略記する

- (1) Husson, L., L'intellectualisme de Bergson, P. U. F., (1947) p. 12.
cf., D.I., chapitre III.
- (2) D.I., p. 96 et suiv.
- (3) Jankélévitch, V., Henri Bergson, P. U. F. (1959) p. 118.
D.I., avant-propos
- (4) Jankélévitch, V., ibid., p. 116. 「心身関係についてのベルクソンの理論は多くの重大な困難を引き起こすのであるが……そのした難問のいくつかは学説の首尾一貫性そのものにかかわっている。つまり『物質と記憶』が『試論』の結論に忠実であるかという問題である。」
- (5) これらの形容詞は必ずしも厳密に使用されているわけではないが、一応の指標としては役に立つものである。すなわち純粹知覚においては直接的か間接的かが、収縮においては一か多かが、功利性においては純粹か不純かが問題なのである。またベルクソンは「意識の証言によれば」といった意味で「直観」なる語を用いている場合がある。
- (6) ベルクソン自身、知覚論においても、時に肯定的に「表象」という術語を用いてはいる。しかし、それは知覚イメージと同義の場合であり、ベルクソンがこの言葉を知覚論において使用する多くの場合は否定的である。ベルクソンは素朴实在論者ではない。ベルクソンは实在論の欠点を「わたしたちが实在について持つ直接的な認識を实在から引き出すことができない」(p. 259) ことと、「等質的空間を知性と事物を隔てる障壁として立っている」(pp. 259-260) 点に見ている。
- (7) オースティン『知覚の言語』(勁草書房)
- (8) 「反射」については、拙論『物質と記憶』における反射と運動(日本哲学会、『哲学』第四号所収)を参照せよ。